



## 答えが一つとはかぎらない課題解決にむけて

校長 古屋 澄人

1月25日(土) JICA 横浜で「横浜市 ESD 推進コンソーシアム 交流報告会」が行われ、昨年度に引き続き5年生の代表9名が参加しました。この交流会は、横浜市内の小学校・中学校・高等学校の ESD 推進校が一堂に会して日ごろの取組の成果を報告し意見交換する会です(児童生徒約150名。教職員・保護者・外部等約130名参加)。第1部は5年生がこの1年間に取り組んできた活動をポスターセッションで報告しました。第2部は児童・生徒による現代社会における課題解決に向けての話し合いでした。(参加した子どもの感想は学校だよりの中面に掲載されています。)

第2部では、今日的な課題として「水不足」「自然災害」「食品ロス」「エネルギー問題」「温暖化」などが挙げられていて、高校生がリードしながら小中学生が活発な意見交換をしていました。その中で「必要な食べ物を日本人がどれだけ捨てている？」をテーマにしたグループではこんな話し合いがなされていました。



「自分で作って、自分で食べること。地産地消っていうの？が必要では」  
「冷凍食品を減らせばむだはなくなるかも」「あーそっか なるほど」  
「でも、冷凍食品は賞味期限が長いからむだとはいえないんじゃない」  
「じゃ、生のものをへらしていけばいい」  
「生のものを減らしてもむだの解決にならないんじゃない」  
「うーん」「それだったら必要な食品だけを買うようにすれば」(以下熱心な話し合いは続く)

地産地消の必要性や輸入食品の量について検討する必要性などさまざまな意見がでました。これらの課題の解決に向けた正解は一つではありません。

交流会に参加していた東洋大学の米原あき教授から答えが一つとは限らない課題の解決に向けて取り組んでいる子どもたちへメッセージがありました。「答えが一つでないことを考えるとモヤモヤ感が残るよね。このモヤモヤ感から目をそらさないでほしいのです。つまり、考えることをやめないでほしいということです。考えるためには、知識も必要です。学校で学んでいる教科は、答えがあることを学んでいると思うけど、これは答えがないことを考えるために必要なことです。(途中略)一つのことを実現するには、1+1が3や4や5になるように、いろいろな人が寄ってたかって少しずつ取り組んでいくことが大切です。」

意見交流会の中で本校の5年生が「ほかの学校の発表を聞いて、SDGsはできることを少しずつ行うことが大切だと思いました。」と発言しました。私たち大人こそ持続可能な社会の実現に向けて考え続けていかなければいけないと改めて感じました。